

榛谷重朝の基礎的研究

—『吾妻鏡』を中心に—

資料課 渡辺 真治

はじめに

神奈川県立公文書館の所在する横浜市旭区、中でも二俣川で、中世武士と言えば名があらがるのは畠山重忠である。区内には元久2（1205）年の二俣川合戦の後に重忠の首を葬ったとされる首塚、重忠主従の遺骸を埋葬したとされる六ツ塚、後を追って自害した重忠室の菊の前を葬ったとされる駕籠塚などの史跡が残されている。また、昭和30（1965）年には地元鶴ヶ峰と埼玉県川本村（現深谷市、畠山氏の苗字の地）の有志により旭区役所の向かいに畠山重忠公碑が建立されているほか、六ツ塚のある東隆山薬王寺では命日である6月22日に毎年慰霊祭が行われ、多くの人で賑わっている。旭区域で重忠の人気は非常に高いものがある。

だが重忠は、たまたま二俣川の地で落命しただけの、言ってしまうと余所者である。他方で、重忠の従兄弟に当地を苗字の地とする^{はんがやしげとも}榛谷重朝がいる。この榛谷重朝こそが本当の旭区や二俣川所縁の中世武士とすることが出来るはずである。しかるに榛谷氏の知名度は地元でも驚くほど低い、というより皆無と言うに等しい⁽¹⁾。また、先行研究と呼ぶべきものもほぼ存在しない。榛谷氏の研究は急務と言えよう。

さて、榛谷氏に関する専論と呼べるものは管見の限り皆無である。多くの場合、当地に存した伊勢内宮領荘園である^{はんがやのみくりや}榛谷御厨について叙述される中で、付屬的に言及されるという形が多い。そうした中で戦前期のものとして沼田頼輔「歴史上より観たる程ヶ谷の変遷」⁽²⁾、華城散士こと梅田義彦「関東八州における神宮領とその遺跡」⁽³⁾、磯貝正「榛谷御厨の研究」⁽⁴⁾がある。この時期の研究により榛谷御厨に関する基本事項の掘り起こしはなされたが、中でも磯貝氏は榛谷御厨に関する基本資料である神戸神明社の縁起⁽⁵⁾を検討して御厨の来歴やその領域について考察すると共に、古代～室町期までの関係資料を列挙している。

またこの時期の自治体史として『保土ヶ谷区郷土史』上巻⁽⁶⁾があり、沼田氏の論考など

榛谷重朝の基礎的研究

を参考にしながら榛谷御厨を中心に、旭区が分区する以前の旧保土ヶ谷区域の歴史を叙述している。

戦後期のものでは『旭区郷土誌』⁽⁷⁾の「第二章第一節 御厨」の項で榛谷御厨について簡潔にまとめられると共に榛谷氏についても触れられているが、ほんの数行の記述に止まっている。これは「第三節 畠山重忠と鶴ヶ峰・二俣川」と比較すると雲泥の差であり、地元旭区での知名度・注目度の低さを反映していると言えよう。

他方、『保土ヶ谷区史』⁽⁸⁾では武士論や御厨に関する近年の研究成果を踏まえて榛谷氏や榛谷御厨が叙述されると共に、榛谷氏との関係が注目される室町時代の上総国の武士、榛谷重氏についても記述されている。

また近年では、丸島和洋『郡内小山田氏』⁽⁹⁾や、北条氏研究会編『武蔵武士の諸相』⁽¹⁰⁾所収の菊地紳一「武蔵武士の概念と特色」、池田悦雄「小山田氏の汚名について」などで、小山田一族として重朝について触れられる機会が増えているのは新しい傾向と言える。

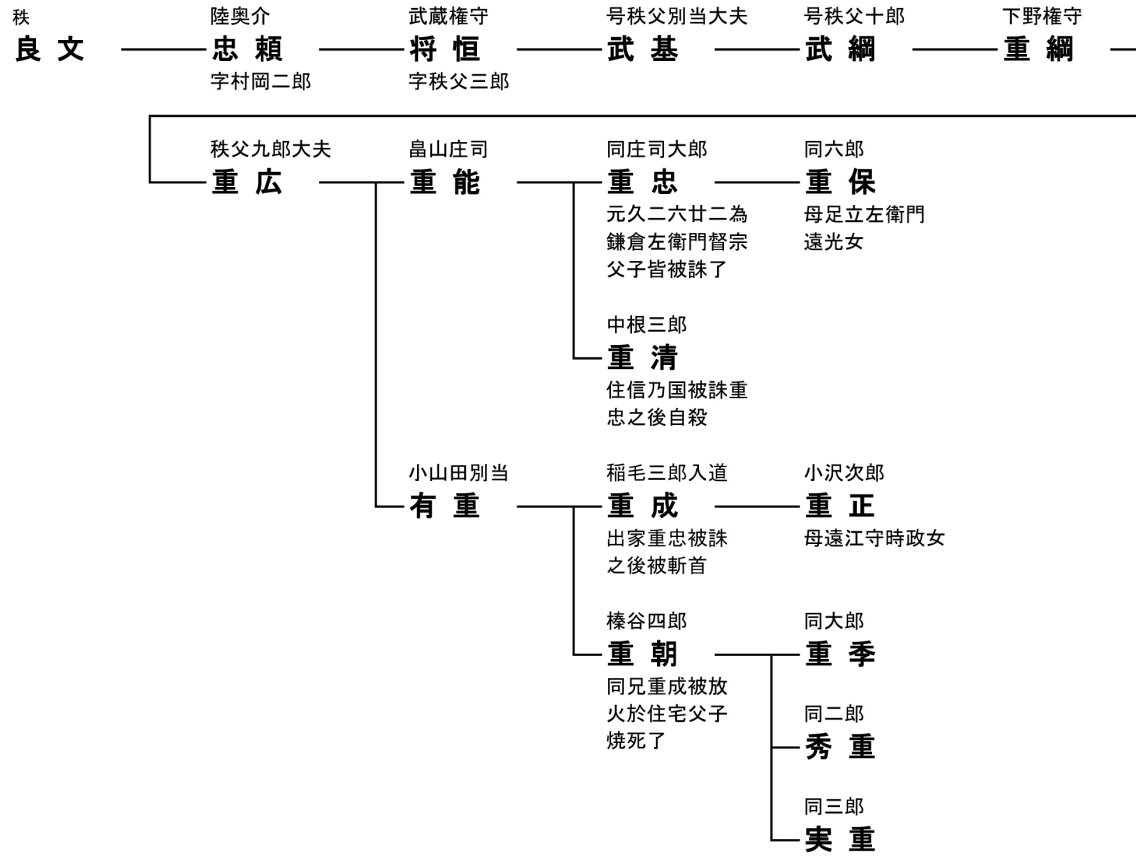
このほかにも榛谷氏について言及した文献自体は枚挙に暇が無いが、いずれも秩父平氏の一族という以上の積極的な記述はあまり見られない。これは、榛谷氏が鎌倉時代の早い時期に滅亡したため、良質の史料が残されていないというのが大きな要因であろう。結果、榛谷氏について考察する上では単体で論を立てるのは困難であり、他の氏族との比較という方法を採らざるを得ない。本稿ではその前提として、鎌倉時代史研究の基本史料である『吾妻鏡』⁽¹¹⁾の記事を中心に、榛谷氏に関する基礎的事項の洗い出しと研究進展の為の予察を得ることを目的としたい。

1 榛谷氏の系譜と故郷

1.1 秩父氏一族の榛谷氏

榛谷氏は、桓武平氏の一流である秩父氏の一族である。桓武平氏の系図は多数あるが、山形大学附属図書館所蔵中条家文書の「桓武平氏諸流系図」⁽¹²⁾が最も高い価値を認められている。これは桓武平氏流の武士団の系譜集とでもいえるべきもので、相模三浦氏の末裔で、越後国奥山荘（新潟県胎内市）に北遷した三浦和田氏の子孫である中条家に伝えられたものである。この中の秩父氏流の系図に榛谷氏が見える。（図1）

図1 秩父平氏の系譜 (桓武平氏諸流系図より抄出)



秩父氏は古代末期以来、武蔵国を中心とした南関東に盤踞した武士である。平良文の孫将常（将恒）は武蔵権守となり、秩父郡中村郷に本拠を置き、秩父盆地一帯を支配して秩父氏を称した。その子武基は秩父牧の別当となり、さらに武基の孫の重綱以来、秩父氏一族は代々武蔵国惣検校職を務めたとされる。榛谷氏はこの秩父氏の中で、小山田有重の子の重朝に始まる一族で、重朝は稲毛重成の弟、畠山重忠の従兄弟に当たる。

重綱の子、重弘（重広）の子のうち、重能の系統は畠山・長野（桓武平氏諸流系図では中根）を苗字としている。畠山は埼玉県深谷市畠山、長野は埼玉県行田市長野に比定されており、いずれも武蔵国北部に勢力を伸ばしたと言えよう。一方、有重の系統は小山田・稲毛・榛谷・小沢を苗字としており、武蔵国南部に進出したようである。小山田は東京都町田市上小山田・下小山田周辺、稲毛は神奈川県川崎市中原区・高津区周辺、小沢は川崎市多摩区・麻生区・東京都稲城市の周辺に比定されている。秩父平氏は荒川・多摩川といった河川沿いに勢力を伸ばした事が指摘されているが、小山田一族は鶴見川沿いに勢力を伸ばしたと言えるだろう。また、『吾妻鏡』等では重成・重朝の弟に五郎行重（行平とも）

榛谷重朝の基礎的研究

が見えている。兄二人とは異なり終始小山田を苗字としている所から、小山田の地はこの行重が伝承したと考えられよう。

以上をまとめると、榛谷重朝は武蔵国を中心に盤踞した秩父平氏の一族で、その中でも鶴見川水系沿いに勢力を伸ばした小山田氏の出身という事になる。

1.2 苗字の地 榛谷御厨

榛谷氏の苗字の地、それが榛谷御厨である。御厨とは『広辞苑』に拠れば「①神饌^{しんせん}を調進する屋舎^{ごくうしよ}。御供所。②古代・中世、皇室の供御^{くご}や神社の神饌の料を献納した、皇室・神社所属の領地。古代末には主として伊勢神宮の荘園となる。神領。みくり。」とあるように、一般に伊勢神宮の神領荘園をいう。

榛谷御厨についても断片的な史料しか残されておらずその全貌を窺い知ることは困難である。伊勢神宮の神領研究の基本資料である建久3（1192）年8月の伊勢大神宮神領注文⁽¹³⁾では、国毎に神領である御厨や御園が列挙される中で、武蔵国分の冒頭に「ハムカヤ」と注が振られて榛谷御厨が見えている。これによれば

- ・伊勢神宮のうち、内宮（天照大神を祭る皇大神宮）の所領である。
- ・建久3年当時は給主が故民部卿家である。
- ・保安3（1122）年に建立され、代々国司から奉免されて来た。
- ・供祭物は白布30反と斎宮寮への納物である。

ことが知られる。

御厨の建立の時期については『新編武蔵国風土記稿』卷之六十九、橘樹郡下岩間町神明社の項目に引用されている天文24（1555）年閏10月の「武蔵国榛谷御厨庄之内神戸神明濫觴之事」という縁起がある⁽¹⁴⁾。これは現在、横浜市保土ヶ谷区神戸町に鎮座する神戸神明社の由来を記したもので、天禄元（970）年に伊勢大神宮が榛谷の峰に影向し、次いで川井、二俣川の仮宿、保土ヶ谷の宮林・八坂へと飛び移ったとの伝承を記しており、これを御厨の端緒と見る考えもある。しかし関東の御厨の多くが院政期の建立である事を踏まえると、榛谷御厨もまた伊勢大神宮神領注文の記す保安3年建立説が妥当であろう。

また御厨の四至（東西南北の境界）について記した史料は目下知られないが、『新編武

蔵国風土記稿』巻之八十三、都筑郡二俣川村の項には、「榛ヶ谷 村の中央より南のかたへかけての小名なり、按に当郡及び橘樹郡へかけて榛ヶ谷と云庄名あり、これ当所の地名より起りし唱なるべし」と記されている。ほかにも同書では橘樹郡の和田村・坂本村・仏向村・下星川村・保土谷宿・下岩間町・芝生村、都筑郡の市野沢村・今宿村・川島村・川井村に榛谷御厨の故地である旨の記述が見られる事から、現在の横浜市旭区から保土ヶ谷区にかけての一带が榛谷御厨の領域と考えておきたい。これこそが榛谷氏の苗字の地である。

しかし現在では榛谷の地名は旭区さちが丘の「半ヶ谷」橋や「半ヶ谷」バス停に残る程度となっている。これもまた、地元で榛谷氏の認知度が低い一因であろう。

2 榛谷重朝の軌跡 — 『吾妻鏡』 を中心に —

重朝を中心にした榛谷氏が『吾妻鏡』に登場する記事の一覧が表1である。都合57件、日数で言えば52日分の記事がある。その内容から試みに弓矢関係・儀礼関係・軍事関係・その他の4つに分類してみた。以下、それぞれについて見てみたい（[]内の数字は表1の番号と対応する）。

2.1 弓矢関係記事

重朝の登場する記事で圧倒的に多いのがこの弓矢関係記事である。牛追物 [2、7]・的始 [8、20、41]・弓始 [9、10、17、27、39、42、46、48]・小笠懸 [19、30、32、44、49]・流鏑馬 [25、37] 等で射手をつとめている。重朝が武士の表芸であった弓矢に通暁した人物であったことが知られよう。

[6] は源行景が進上した弓を分給された壮士の中に名が見えているというものであるが、彼らは「勤仕弓場御的之輩」とされており、重朝が得意の弓矢を活かす形で頼朝に仕えていた事が分かる。

[9] の記事では弓始の射手として頼朝に指名された下河辺行平が、立ち合う相手として立候補した藤原季長を役者不足としてであろう、無視し続けたのに対し、頼朝により新たに重朝が指名され、行平と立ち合っている。重朝が『吾妻鏡』で弓の名手とされている行平に、腕を競うのに相応しい相手と認識されていたことが分かる。

[31] は小山朝政邸での弓矢談義に加わったものだが、これは翌年の頼朝の二度目の上

榛谷重朝の基礎的研究

洛に際して予定されていた摂津住吉社（現住吉大社、大阪市住吉区）での流鏑馬奉納に向けて、東国の射手の手本を定める為であった。参加したメンバーとして下河辺行平以下 18 名の名があげられているが⁽¹⁵⁾、皆弓矢の達人とされる人物であり、そこに名を連ねた重朝もまた、幕府を代表する弓矢の達人の一人であった。

以上、弓矢関係記事からは、得意の弓矢を活かして頼朝に仕えた武人としての重朝の姿を看取することが出来よう。

2.2 儀礼関係記事

ここでは幕府の儀礼・行事に参加した記事を見てゆく。

頼朝や頼家、実朝の出御に随兵等として供奉した [5、16、18、21～23、29、33～36、40、49] や、鶴岡八幡宮寺の塔供養で禄の馬の引手をつとめた [11] などからは、当時の一般的な御家人としての重朝の姿が見て取れる。放生会で御調度懸すなわち頼朝の弓矢を持って供奉した [15] や、那須野に向かう頼朝に弓矢を帯して供奉した [22] は弓矢関係記事と見る事も出来よう。また [16] では入洛した頼朝軍の中で五十七番に三浦平六（義村）・小山田五郎（行重）と並んで見えている。重朝滅亡時の因縁を思うと、三浦義村と並んで行進しているのは興味深い。

以上、儀礼関係記事からは、ごく一般的な御家人としての重朝の姿が明らかになった。

2.3 軍事関係記事

ここでは軍事関係記事を見てゆくが、『吾妻鏡』登場以前の重朝については史料が無いため不詳である。しかし、他の秩父平氏の一族同様、治承 4（1180）年に頼朝が房総半島を経て勢力を拡大し武蔵国に入った段階で、その麾下に加わったものと考えられる。

さて、重朝の軍事関連記事の最初は元暦元（1184）年 2 月の一谷合戦である [3]。ここでは源範頼の率いた大手軍に名が見えている。以降の屋島・壇ノ浦の合戦でも重朝は範頼軍に属している事が『延慶本平家物語』⁽¹⁶⁾等から知られるのだが、『吾妻鏡』ではその様子は語られない。

そうした重朝が活躍を見せるのが元暦元年の一条忠頼の誅殺である [4]。忠頼は甲斐

源氏の一族で、頼朝の同盟軍的な立場で自立性の高い存在であったが、それを憂慮した頼朝により誅殺される事となった。『吾妻鏡』では元暦元年6月16日の記事になっているこの事件については実際には4月26日に起こったことが指摘されている⁽¹⁷⁾。ここで重朝は父有重、兄重成と共に重要な役を果たした。

すなわち、頼朝によって忠頼が召し出され、御家人列座の中で献杯の儀が行われる。討手を命じられた工藤祐経が銚子を持って酌をしていたものの、事の重大さに顔色を変えてしまう。有重はそれを察して立ち上がり、「このような御酌の役は老人の務めるもの」といって銚子を受け取る。これに合わせて重成・重朝の兄弟が盃を持って忠頼の前に進んだところで、有重が息子等に陪膳の際の故実を語って聞かせて忠頼の気を逸らせ、その隙に天野遠景が忠頼を誅したという。その後、主人の横死を目の当たりにして御所に斬り込んだ忠頼の従者との戦闘でも重成・重朝は活躍している。父有重の老獪さ、小山田一族の結束の強さを感じさせる記事である。

その後の軍事関連記事としては、文治5（1189）年の奥州合戦への従軍〔12〕や建仁3（1203）年の比企氏与党の討伐への参加〔45〕が知られる。また〔13〕は、奥州合戦の際に重朝が乗馬を毎日洗った事が「今度御旅館之間、珍事」とされているものである。つとに馬との関わりを指摘される秩父平氏の一員として相応しい逸話と言えよう。

なお『吾妻鏡』の記事では登場しないものの、『延慶本平家物語』では寿永三（1184）年正月の木曾義仲攻めの際、兄重成と共にやはり大手の範頼軍に属している⁽¹⁸⁾。中でも「勢多ヲバ稲毛三郎、榛谷四郎ガ計ニテ、タナカミノ貢御ヲ渡テ追落ス。」とされているのが注目される。「タナカミノ貢御」は滋賀県大津市田上の辺りで瀬田川（宇治川）の渡河点の一つである。重成・重朝兄弟に土地勘があったとは思われないが、あるいは前年まで京都で平家に仕えていた父有重から得られた情報があったのかも知れない⁽¹⁹⁾。ただ、義仲攻めの際しての範頼軍については、瀬田で義仲方を駆逐したのみで近江に留まり入洛をしていないとする考えもあり⁽²⁰⁾、この記事を重要視するのは生産的ではないかも知れないが、攻め手の主力の一人として名があげられている点は注目して良いであろう。

以上、軍事関連記事を見てみたが、当時の武士の典型として治承・寿永合戦、奥州合戦、比企氏の乱といった合戦に参加し、それなりのエピソードも残している事が確認出来た。

2.4 その他

ここでは1～3に分類できない記事について見てみたい。

建久4（1193）年の富士の巻狩りで起きた曾我兄弟の仇討ち事件に際し、頼朝による五郎時致の尋問に列席した〔24〕や、正治元（1200）年の梶原景時弾劾状に加わった〔38〕などからは、重朝が一廉の御家人として存在したことが知られる。

そうした中で注目したいのが〔1〕の記事である。重朝の『吾妻鏡』初登場記事でもあるが、養和元（1181）年4月、御家人の中から「殊達弓箭之者又無御隔心之輩」を選んで頼朝の寝所の警護をさせる事としたという。ここで選ばれた江間四郎こと北条義時以下の11名は比較的若い、有力御家人家の次世代層に当たる人物たちである。細川重男氏はこの11名を一般の武士団で言う家子（惣領と血縁を有する従者たち）に相当する、頼朝個人の親衛隊とでもいふべきものと評価している⁽²¹⁾。なおここでも弓との関わりが見えているのは象徴的と言えよう。

もうひとつ注目したいのが〔26〕の記事である。この前日、鷲宮神社（埼玉県久喜市鷲宮）の前身である大田荘鷲宮の宝前に血が流れるという怪異が起こり、卜筮の結果は兵革の兆しとの事であった⁽²²⁾。そこで頼朝は重朝を使者として派遣し、神馬を奉納すると共に社壇を荘厳させたという。

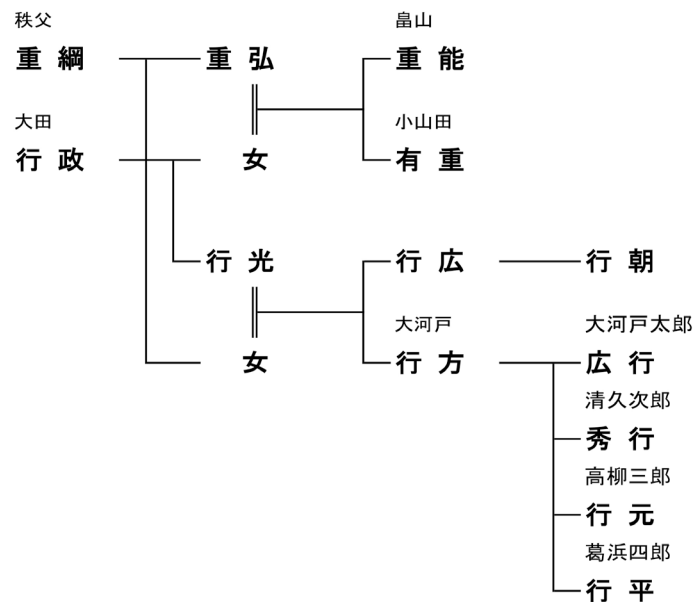
重朝が単独で登場する希有な記事であるが、従来は鷲宮が登場するという以上の注目は払われて来なかった記事と言える。確かに武蔵の神社に武蔵武士が派遣された、という点では特記する事も無い記事のようであるが、榛谷と鷲宮では広い武蔵国の南北の両端であり、あまりにも懸隔の地と言えよう。そこに一定の事情を見出したいのである。

『吾妻鏡』で社寺に武士が使者として派遣される場合、その地に所縁の者が選ばれている傾向が見られる⁽²³⁾。これを踏まえると重朝も、鷲宮になんらかの所縁があったと考えられよう。端的に言えばそれは、鷲宮周辺を所領としていたからであると考えられる。

鷲宮の鎮座した大田荘は武蔵国埼玉郡に存した八条院領荘園で、現在の埼玉県北埼玉郡から南埼玉郡・大里郡の一带に比定されており、大田氏が開発領主と考えられている。この大田氏はいわゆる秀郷流藤原氏の一族だが、『尊卑分脈』等で行方について「母秩父太郎

重綱女」⁽²⁴⁾とされており、以前より秩父氏とは縁の深い一族とされて来ている。また、近年畠山・小山田といった秩父平氏重弘流の系譜史料として注目されている「指宿文書」所収「平姓指宿氏系図」⁽²⁵⁾では、畠山重能・小山田有重兄弟について「母大田行政女」とされており、畠山・小山田の一族とは重縁関係にあった事が分かっている(図2)。しかし後述するように、二俣川合戦の翌日、稲毛重成を討ち取ったのはこの大田氏の一族である大河戸行元であった[50]。

図2 大田氏一族と秩父平氏(『尊卑分脈』、続群書類従所収「結城系図」、指宿文書所収「平姓指宿氏系図」を参照し作成)



鎌倉時代初期の大田氏一族と小山田一族は、重縁関係にありながらも一定の緊張関係を孕んだ間柄であったと考えられる。大田氏の一族は重行(図2では行方)が平家に属した咎に連座したものの養和元(1181)年に赦免されているが⁽²⁶⁾、この過程で所領の一部が縁戚である小山田一族、中でも重朝に渡っていたという経緯を想定したい。

小括

以上、『吾妻鏡』の重朝関係記事を、内容から4つに分類して検討した。

1からは弓矢の達人であった様子、2・3からは当時の一般的な御家人として存在した重朝の姿が浮かび上がった。しかし重朝自身が主体的な動きを見せる記事はほとんど無く、

榛谷重朝の基礎的研究

なかなか実態を掴み難い人物であることが再確認される事となった。

なお、史料中の表記に注目してみると重朝は、榛谷のほかに稲毛 [3]、小山田 [11、12、16、18、21、33] の苗字を冠して登場している。兄重成については建久3 (1192) 年以前は小山田、同4年以降は稲毛での表記が多いことに稲毛荘への権力浸透の変化を見る見解もあるが⁽²⁷⁾、重朝についてはそうした傾向は見出せない。敢えて言えば儀礼関係の記事に兄重成と共に登場する場合に小山田の苗字で登場することが多いが ([11、12、16、21] が相当する)、これは『吾妻鏡』編纂時の典拠史料に因るものではないだろうか。重朝は当初より榛谷を苗字としたのであり、換言すれば小山田一族による榛谷御厨の領有は重朝の登場以前、つまり父有重の代ないしはそれ以前まで遡るものと考えておきたい。

3 榛谷重朝の滅亡

3.1 二俣川合戦と重成・重朝兄弟

元久2 (1205) 年6月22日、畠山重忠が滅亡した⁽²⁸⁾。世に言う二俣川合戦であるが、その背景等について詳説するのは本稿の趣旨ではないので省略する。

その翌日、重忠討伐軍を率いた北条義時は父時政に対し、重忠の無実を訴えた。その結果、重忠の滅亡に至る陰謀の首謀者は稲毛重成とされ、時政が密かに女婿の重成と結託し、重成は同族の重忠を裏切った、という筋書きが作り上げられた。酉刻に三浦義村の謀略により榛谷重朝とその子の太郎重季・次郎秀重らが鎌倉経師谷口で殺された。さらに稲毛重成は大河戸行元に、重成の子の小沢重政は宇佐美祐村によって誅殺された。かくして重朝父子を初めとする小山田一族は族滅というに等しい打撃を受けたのである [50]。

この重朝の滅亡に関して、桓武平氏諸流系図で重朝に付された「同兄重成被放火於住宅父子焼死了」との注記が注目される。重朝はその居宅に火を放たれて息子と共に焼死したというのだが、これを『吾妻鏡』の記事と重ね合わせると、重朝の居宅が経師谷にあったという事になるだろう。また『吾妻鏡』では重朝父子を討ったのは三浦義村、稲毛重成は大河戸行元、小沢重政は宇佐美祐村と分記されているが、大河戸氏を含めた大田氏一族が三浦氏の守護下にあった事⁽²⁹⁾を考えると、三浦義村の手により小山田一族が殲滅されたと概括出来る。つまり小山田一族は経師谷の地で共に誅殺されたのであり、重成と重朝の居宅が隣接していたと見る事も可能であろう。或いはそれは父有重の居宅を分割相続したよ

うな形であったかも知れない。

経師谷は『新編鎌倉志』に「経師谷は、弁谷の北にあり。土俗ちやうじが谷と云ふ。【東鑑】に、経師谷とあるは此地の事なり。」とあり⁽³⁰⁾、現在の鎌倉市材木座、石井山長勝寺の東側の谷を指すとされる⁽³¹⁾。鎌倉の東南、中心部からはやや離れた地であり、目立った特徴は指摘できない。頼朝御所に近接した「南御門」に住居したとされる畠山重忠⁽³²⁾と比べるとやはり地味な印象は否めないところである。

なお、重朝の墓や供養塔といったものは目下伝わっていない。兄重成の館跡とされ、重成の供養塔とされる五輪塔がある川崎市多摩区柘形はにやの松本山広福寺には、重朝親子を含む小山田一族の位牌があるという⁽³³⁾。

3.2 その後の榛谷氏

重朝の遺跡は五条局という女官に与えられた事が分かっている [51]。重朝滅亡の直後である元久2（1205）年7月20日に、北条政子の女房5・6人が新恩に浴したが、これらは亡卒の遺領であったとある⁽³⁴⁾。重朝の遺領（榛谷御厨も含むか）が五条局に与えられたのもこの日であったか。

重朝父子の誅殺以降、榛谷氏の動向は杳として知れない。しかし宝治元（1247）年6月の宝治合戦で三浦方として敗死した武士の交名に「榛谷四郎・同子息弥四郎・同五郎・同六郎」が見えている [54～57]。四郎・弥四郎という仮名を重朝の四郎を踏まえたものと考えれば重朝の後裔、世代で言えば重朝の孫や曾孫あたりに当たる人物たちであろうか。同じ交名には「稲毛左衛門尉・同十郎」も見えている。兄重成の後裔と共に、ある意味では仇と言える三浦氏の被官となって命脈を保っていたものの、宝治合戦により榛谷氏は滅亡したと考えられる。

室町時代に上総国の武士で、犬懸上杉氏の被官として武蔵守護代をつとめた榛谷重氏がいる⁽³⁵⁾。実名に重を用いる点でも興味をそそるが、この榛谷氏については榛谷重朝の子孫とする考えと、上総国埴谷はにやの埴谷氏とする考えとがあり、重朝との関係は目下不明である。

おわりに

本稿では『吾妻鏡』の記事を中心に榛谷重朝の軌跡を辿ってみた。

重朝は基本的に秩父平氏、ないしは小山田一族の一員として登場する記事が多く、自身が主体的な動きを見せることはほぼ皆無である。従来、研究の俎上にあげられる事がほとんど無かったのも納得である。

しかし具に見てみると、鷲宮関係記事から窺われる大田氏一族との関係など、検討すべき課題も浮かび上がってきた。また、分厚い研究史のある畠山氏との比較、あるいは手堅い研究が重ねられている父有重と小山田保、または兄重成と稲毛荘に関する研究成果との摺り合わせで見えてくるものもあると思われる。史料の欠乏は如何ともしがたいが、地道に考察を進めたいと考えている。

【注】

- (1) 筆者は先頃、平成 29 年度神奈川県立公文書館アーカイブズ講座（2017 年 8 月 27 日開催）にて「ハタノヤ→ハンガヤ→ホドガヤ？ 二俣川の中世と榛谷御厨」と題して講座を行ったが、終了後に寄せられた感想や、受講者を対象に行ったアンケートでも「畠山重忠は知っていたが、榛谷重朝は初めて知った。」といった意見が大多数であった。
- (2) 『武蔵野』 8-1（雄山閣出版 1926 年）
- (3) 『史蹟名勝天然記念物』 8-2～13-12（刀江書院 1933～1938 年）のち『伊勢神宮の史的研究』（雄山閣出版 1973 年）に再録
- (4) 『史蹟名勝天然記念物調査報告書』 4（神奈川県 1936 年）
- (5) 『新編武蔵国風土記稿』 卷之六十九 橘樹郡之十二 下岩間町に掲載。なおほぼ同文のものが神奈川県立公文書館寄託「武蔵国都筑郡二俣川村善部（旭区）和田家文書」に「神戸神明宮縁起（写）」の名で存する（ID 2199523130）。
- (6) 保土ヶ谷区郷土史刊行委員会 1938 年
- (7) 旭区郷土史刊行会 1980 年
- (8) 保土ヶ谷区制七十周年記念事業実行委員会 1997 年
- (9) 戎光祥出版 2013 年

- (10) 勉誠出版 2017年
- (11) 本稿では最善本とされる吉川本を底本とする『吾妻鏡吉川本』全三巻（国書刊行会 1973年）を使用した。
- (12) 山形大学小白川図書館 HP の「貴重史料・コレクション」にて画像が閲覧可能（<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/yktop/holding/collection/>）。また『現代語訳吾妻鏡』1（吉川弘文館 2007年）に翻刻が掲載されている。
- (13) 『鎌倉遺文』614号。
- (14) 前掲注5
- (15) 下河辺行平、小山朝政、武田有義、結城朝光、小笠原長清、和田義盛、榛谷重朝、工藤行光、諏訪盛澄、海野幸氏、氏家公頼、小鹿島公業、曾我祐信、藤沢清近、望月重澄、愛甲季隆、宇佐美祐茂、那須光助の18名である。
- (16) 卷第六本八「八島ニ押寄合戦スル事」
- (17) 金沢正大「甲斐源氏棟梁一条忠頼鎌倉営中謀殺の史的意義」（一）・（二）（『政治経済史学』272・446 日本政治経済史学研究所 1988・2003年）
- (18) 第五本七「兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事」
- (19) 『延慶本平家物語』第三末廿「筑後守貞能都へ帰り登ル事」
- (20) 菱沼一憲『源義経の合戦と戦略』（角川書店 2005年）
- (21) 「右京兆員外大尹一北条得宗家の成立」（『鎌倉北条氏の神話と歴史—権威と権力—』日本史史料研究会 2007年）
- (22) 『吾妻鏡』建久4（1193）年11月18日条
- (23) 『吾妻鏡』寿永元（1182）年8月11日条で北条政子の安産祈願のために「伊豆箱根両所権現并近国宮社」に派遣されたのは 伊豆山：土肥遠平、箱根：佐野基綱、相模一宮：梶原景高、三浦十二天：佐原義連、武蔵六所宮：葛西清重、常陸鹿島：小栗重成、上総一宮：上総良常、下総香取社：千葉胤正、安房東条神館：三浦義村、同国洲崎社：安西景益の面々である。このうち箱根と佐野基綱の関係性は不詳であるが、その他はみな神社所在地に所縁の武士である。
- (24) 第二篇藤成孫

榛谷重朝の基礎的研究

- (25) 『鹿児島県史料』旧記雑録拾遺 家わけ十 (鹿児島県 2005年)
- (26) 『吾妻鏡』養和元(1181)年2月18日条。なお重行に行方という別名が伝わる背景として、秩父平氏の影響の強い重行という名を後に改めたという経緯が想定出来るのではないだろうか。
- (27) 清水亮『中世武士畠山重忠』吉川弘文館 2018年
- (28) 『吾妻鏡』元久2年(1205)6月22日条
- (29) 前掲注26
- (30) 大日本地誌体系24『新編相模国風土記稿』第6巻(雄山閣 1998年)
- (31) 『神奈川県地名』(平凡社 1984年)
- (32) 『吾妻鏡』正治元(1199)年5月7日条に「畠山次郎重忠南御門宅」が見えている。
- (33) 伊藤葦天「稲毛三郎重成と枳形城址」(『稲毛郷土史』稲毛郷土史刊行会 1970年)
- (34) 『吾妻鏡』同日条
- (35) 『山武町史』通史編(山武町 1988年)

【表1】『吾妻鏡』の関係記事一覧

No.	人名	年	西暦	月	日	史料中表記	分類	事項
1		養和元年	1181	4月	7日	榛谷四郎重朝	その他	頼朝寝所を護衛する11人に選ばれる
2		寿永元年	1182	6月	7日	榛谷四郎	弓矢	由井浦での牛追物等で射手をつとめる
3		元暦元年	1184	2月	5日	同(稲毛)四郎重朝	軍事	一ノ谷を攻める源範頼軍に加わる
4	6月			16日	同(稲毛重成)弟榛谷四郎重朝/重朝	軍事	御所での一条忠頼誅殺で活躍する	
5		文治元年	1185	10月	24日	榛谷四郎重朝	儀礼	勝長寿院供養に随兵として供奉する
6		文治3年	1187	8月	20日	榛谷四郎重朝	弓矢	源行景が進上した弓を賜った武士の中に名が見える
7				10月	2日	重朝	弓矢	由比浦での牛追物で射手をつとめる
8		文治4年	1188	正月	6日	榛谷四郎重朝	弓矢	碗飯中の御的始で一番射手をつとめる
9				正月	3日	榛谷四郎重朝	弓矢	碗飯中の御弓始で射手をつとめる
10				正月	9日	榛谷四郎重朝	弓矢	頼家の弓始で五番射手をつとめる
11		文治5年	1189	6月	9日	小山田四郎重朝	儀礼	塔供養の禄の一御馬を引く
12				7月	19日	小山田四郎重朝	軍事	奥州へ進発する鎌倉軍中に名前あり
13				10月	1日	榛谷四郎重朝	軍事	奥州合戦の間、毎日馬を洗ったのを珍事と称される
14				4月	11日	重朝	弓矢	頼家の小笠懸に隣席する
15		建久元年	1190	8月	15日	榛谷四郎重朝	儀礼	放生会で御調度懸をつとめる
16				11月	7日	小山田四郎	儀礼	入浴した頼朝一行の五十七番に名前あり
17				正月	5日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓始で一番射手をつとめる
18		建久2年	1191	2月	4日	小山田四郎	儀礼	頼朝の二所詣に先陣随兵として供奉する
19				9月	21日	榛谷四郎	弓矢	稲村崎での小笠懸で射手をつとめる
20		建久3年	1192	正月	5日	榛谷四郎重朝	弓矢	御的始で射手をつとめる
21				11月	25日	小山田四郎重朝	儀礼	永福寺供養に臨む頼朝に後陣随兵として供奉する
22				3月	21日	榛谷四郎	儀礼	那須野に向かう頼朝に弓矢を帯びて供奉する
23				5月	8日	榛谷四郎	儀礼	頼朝の駿河下向に供奉する
24		建久4年	1193	5月	29日	榛谷四郎	その他	曾我五郎の尋問に列席する
25				8月	16日	榛谷四郎	弓矢	鶴岡馬場での流鏑馬で射手をつとめる
26	榛谷重朝			11月	19日	榛谷四郎重朝	その他	鷲宮への神馬奉納の使者をつとめる
27				正月	9日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓始で二番射手をつとめる
28				2月	2日	榛谷四郎重朝	儀礼	北条泰時の元服に参列する
29		建久5年	1194	8月	8日	榛谷四郎重朝	儀礼	頼朝の日向山参詣に後陣随兵として供奉する
30				閏8月	1日	榛谷四郎重朝	弓矢	三崎での小笠懸で射手をつとめる
31				10月	9日	榛谷四郎重朝	弓矢	小山朝政邸での弓矢談義に加わる
32				11月	21日	榛谷四郎重朝	弓矢	御霊前浜での小笠懸で射手をつとめる
33				3月	10日	小山田四郎	儀礼	頼朝の東大寺供養参会に随兵として供奉する
34				3月	27日	榛谷四郎重朝	儀礼	頼朝の参内に随兵として供奉する
35		建久6年	1195	5月	20日	榛谷四郎重朝	儀礼	頼朝の天王寺参詣に先陣随兵として供奉する
36				6月	3日	重朝	儀礼	頼家の参内に供奉する
37				8月	16日	榛谷四郎	弓矢	鶴岡馬場での流鏑馬で五番射手をつとめる
38		正治元年	1199	10月	28日	榛谷四郎重朝	その他	梶原景時弾劾状に参加する
39		正治2年	1200	正月	7日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓始で一番射手をつとめる
40				2月	26日	榛谷四郎重朝	儀礼	頼家の鶴岡参詣に先陣随兵として供奉する
41		建仁元年	1201	正月	12日	榛谷四郎重朝	弓矢	御的始で一番射手をつとめる
42				正月	3日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓場始で三番射手をつとめる
43		建仁2年	1202	9月	21日	榛谷四郎重朝	弓矢	頼家の狩倉下向に弓矢を帯びて供奉する
44				9月	29日	近(重)朝	弓矢	新田忠常宅での小笠懸に加わる
45				9月	2日	榛谷四郎重朝	軍事	比企氏与党の追討軍に加わる
46		建仁3年	1203	10月	9日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓始で二番射手をつとめる
47				10月	10日	昨日御弓始射手十人	弓矢	御所に召され禄を賜る
48		元久元年	1204	正月	10日	榛谷四郎重朝	弓矢	御弓始で一番射手をつとめる
49				2月	12日	榛谷四郎	弓矢	由比ヶ浜での小笠懸等で射手をつとめる
50		元久2年	1205	6月	23日	榛谷四郎重朝	その他	鎌倉経師谷で三浦義村に討たれる
53		建保元年	1213	9月	26日	榛谷四郎重朝	その他	榛谷氏滅亡後、遺跡は五条局が賜る
51	榛谷重季	元久2年	1205	6月	23日	同(榛谷)嫡男太郎重季	その他	鎌倉経師谷で三浦義村に討たれる
52	榛谷季重			6月	23日	次郎季重	その他	鎌倉経師谷で三浦義村に討たれる
54	榛谷四郎			6月	22日	榛谷四郎	その他	宝治合戦で滅亡
55	榛谷弥四郎	宝治元年	1247	6月	22日	同(榛谷)子息弥四郎	その他	宝治合戦で滅亡
56	榛谷五郎			6月	22日	同(榛谷)五郎	その他	宝治合戦で滅亡
57	榛谷六郎			6月	22日	同(榛谷)六郎	その他	宝治合戦で滅亡